

	方劑名	生薬構成 および製法・服用方法
音順	傷寒論・金匱要略条文	読み および解説・その他
た一13	大承気湯	<p><b>大黄</b>（苦寒）4g・<b>厚朴</b>（苦温）8g・<b>枳実</b>（苦寒）3.5g・<b>芒硝</b>（苦寒）4.2g</p> <p>上の4味の内、<b>厚朴</b>・<b>枳実</b>の2味を水400mlを以て煮て200mlとなし、滓を去り、その薬汁の中に<b>大黄</b>を入れ、再び煎じて80mlとなし、また滓を去り、<b>芒硝</b>を内れ溶解して、2回に分けて温服する。<b>大承気湯</b>を服用して下痢をすれば、後は服用してはいけない。</p>
<p>弁陽明病脈証併治第八第31条（傷寒論）</p>		
<p>「陽明病、脈遅、汗出ずると雖も、悪寒せざる者は、其の身必ず重く、短気腹満して喘す。潮熱有る者は此れ解せんと欲す。裏を攻む可き也。手足濇然として汗出ずる者は、此れ大便已に硬き也。<b>大承気湯</b>之を主る。若し汗多く微に発熱悪寒する者は、外未だ解せざる也。其の潮熱せずんば未だ<b>承気湯</b>を与う可からず。若し腹大いに満し通ぜざる者は<b>小承気湯</b>を与え微しく胃氣を和す可し。大いに泄下せしむる勿れ。」</p>		
<p>雖も、解せん、攻む可き、濇然として汗出ずる、已に、主る、未だ、微しく、可からず、泄下せしむる勿れ</p>		
<p>解説 陽明病で脈が遅で、若し汗が出る事が多く、微に発熱、悪寒する人は、表が未だ解していないのであるが、同じく脈が遅となり、汗が出ていても、悪寒のしない人は、表証が止んだのであり、身体が必ず重だるくなって、呼吸が早くなり（息切れ）、腹が張って（腹満）、ゼイゼイとして、潮熱のある人は、熱が裏の腑である胃に入ったのであり、裏を攻めるために下しをかけてやるべきである。その場合に、手足からしっとりと汗が出ている者は、四肢は脾胃の主るところであり、身体の体液がよって胃に不足し、熱が生じ、大便が既に硬くなったのであるから、<b>大承気湯</b>で胃熱を下してやればよい。もし汗が多く出て、微発熱、微悪寒のあるものは、表証が未だ残っているのである。その熱の状態が潮熱の様にならない場合には、<b>大承気湯</b>を与えてはいけない。もし大いに腹部膨満し、便秘する場合は、<b>小承気湯</b>を与えて少し胃の氣を調和してやればよいのであって、<b>大承気湯</b>で大いに下し過ぎてはいけない。</p>		
<p><b>大承気湯証</b></p> <p>新古方薬囊によれば「喰い過ぎ等にて熱あり、身体だるく、腹下りて、食物を欲せざる者。胸張り、腹堅く、足縮まりて引きつきたる者。此の場合首筋は板の様ならず、腹張り痛み便通なく、舌の黄色き者等。」と記されている。</p> <p>「方劑決定のコツ」の注釈</p> <p>舌が黄色く、乾燥している場合には、内熱による事が多く、胃熱が強かったり、胸脇の熱などによって現われる。黄苔に湿り気のある時には、虚熱によって現われることが多い。</p>		
<p><b>小承気湯証</b></p> <p>新古方薬囊によれば「<b>大承気湯証</b>の軽き者に用ふべし、或は大便幾日も無く<b>大承気湯</b>を用ひ度き所なれども<b>大承気湯</b>にて間違いないかと大事を取る時に、試みに用ひることがある。此の場合<b>小承気湯</b>を服して、腹内にグーグーと腹鳴りが聞こゆる者には<b>大承気湯</b>を与へて好し。若し軽き時は、此の湯にても癒ゆることあり、風などの後に寒氣は取れたれども熱除かず、身体熱苦しく、小便数多く、大便堅きものにも宜し。」と記されている。</p>		
<p>弁陽明病脈証併治第八第32条（傷寒論）</p>		
<p>「陽明病、潮熱、大便微硬の者は<b>大承気湯</b>を与う可し。硬からざる者は之を与えず。若し大便せざること6、7日なれば恐らく燥屎あらん。之を知らんと欲するの法は少しく<b>小承気湯</b>を与え、湯入りて腹中転屎氣する者は此れ燥屎有り。乃ち之を攻む可し。若し転屎氣せざる者は此れ但だ初頭硬く後必ず溏す。之を攻む可からず。之を攻むれば必ず脹満し食す能わざる也。水を飲まんと言する者に水を与うれば則ち噉す。其の後発熱する者は必ず大便復た硬くして少き也。<b>小承気湯</b>を以て之を和す。転屎氣せざる者は慎んで攻む可からざる也。」</p>		
<p>与う可し、若し、燥屎、転屎氣、乃ち、但だ、溏す、可からず、食す能わざる、則ち、噉、復た、もつて</p>		
<p>解説 陽明病で、潮熱（身体の中の方から熱が出て来る様子を潮に例えている）を発するのは胃の実熱による。大便が少し硬い者には、<b>大承気湯</b>を与えるべきである。大便が硬くない者には与えてはいけない。もし大便が出ないことが6、7日も続く場合には、恐らく燥いた屎があるであろう。燥屎があるかどうかを知ろうとする方法は、少し<b>小承気湯</b>を与えてみる。<b>小承気湯</b>を服すると腹の中がグーグーと鳴るものは、燥屎がある証拠であるから下しをかけてやるべきである。その場合に、腹の中がグーグー鳴らないもので、ただ初めの方は便が硬くて後の方がドロドロのアヒルの様な便をするものには、未だ胃熱が実していないから下剤をかけてはいけないのである。この様な胃実になっていないものに、間違えて下しをかけると、胃が冷えて、必ず腹が張って、食欲が無くなってしまふ。この様な人で、水を飲みたがっている者に水を与えると、更に胃が冷えてシャクリを起こしてしまう。下してはいけないものを<b>大承気湯</b>で下した後で熱を発する者は、必ず大便がまた硬くなって、少ないはずである。この様な場合は<b>小承気湯</b>で内熱を調和してやればよい。<b>小承気湯</b>を少し与えて一転屎氣しないものには、間違っても<b>大承気湯</b>の様な強いもので下しをかけてはいけないのである。</p>		
<p>陽明経には、陽明胃経と陽明大腸経とがある。太陽経の熱邪が陽明経に内攻すると、目痛、鼻乾、身熱、口乾などの症状が現われる。しかし大便は硬くなく、大抵は悪寒が残っている。また例え大便が硬くても、少しでも表証が残っておれば、まだ腑の熱になっていなく、脈も浮のことが多い。この場合は先ず発汗する。熱邪が、陽明の腑である胃、大腸まで内攻すると、陽明内実証となり、身熱、汗出、不悪寒、潮熱、譫語、腹満、大便硬などの症状が現われる。この場合は、下剤を用い腸から熱を抜いてやる。</p>		
<p>陽明内実証が形成される原因としては、</p> <p>一つには、太陽病で汗、吐、下などにより、熱邪が裏に入り、津液を損傷することによって生じる。この場合、胃、大腸は乾燥し潤いを失って大便も硬くなる。また胃、大腸の燥熱が激しいために、津液は追われる様に小便として出て小便は多くなるのに、胃、大腸に還元出来ない故に大便は硬くなる。つまり小便の回数が多くなる程、胃、大腸の燥は悪化し、便秘もひどくなる。また停滞した熱邪が心にも影響すると、煩躁も生じる。</p> <p>一つには胃、大腸の燥熱が激しいために、津液は追われる様に汗が多くなって、胃、大腸が乾燥して、大便が硬くなるという悪循環も生じる。燥熱が上行し、心を蒸す状況が生じると譫語が起こる。例え胃、大腸の燥熱、大便硬による便秘、小便多回数、発汗があっても、軽い発熱、悪寒があれば表証が残っているので、先ず発汗剤で発汗させる。もし軽い発熱、悪寒の表証がなければ、<b>小承気湯</b>で下して胃、大腸を治せばよい。もし表証が残っていても、いなくても津液が損傷するまでに至っていないと、軽度、又は初期の段階の陽明病腑証のときは、<b>調胃承気湯</b>で軽く下して、胃氣を調和させるとよい。</p> <p>一つには、太陽病を発汗したけれど、発汗が不十分で表証の熱邪が裏に入り、内熱が外に蒸して汗が出て、悪寒しない時は、<b>調胃承気湯</b>を用いて胃氣を調和するとよいが、表証が残っていて発熱、悪寒を伴う時は、下してはならず<b>葛根湯</b>を用いて表邪と陽明経に陽鬱している熱邪を宣散させる。</p>		
<p><b>小承気湯</b>は、<b>大承気湯</b>を選択したいが間違いではないかと迷う場合に用いるが、もし<b>小承気湯</b>を服用した後、腹中でガスが動く場合は、<b>大承気湯</b>に変えるか、または<b>小承気湯</b>を継続服用させて様子を見てもよい。</p>		
<p>参考 太陽の邪が未だ残っていて、完全に陽明の腑の熱になり切っていないのに下すと、表は熱し、裏は虚、または寒（冷え）の状態になり、腹が張って食欲が無くなる。この時は<b>小建中湯</b>・<b>人参湯</b>を用いて、脾胃を温め、陽氣を高める。</p>		
<p>弁陽明病脈証併治第八第36条（傷寒論）</p>		

「傷寒、若しくは吐し、若しくは下してあと解せず、大便せざること5、6日より上って10余日に至り、日晡所潮熱を發し、惡寒せず、独語、鬼を見る状の如し。若し劇しき者は發すれば則ち人を識らず。循衣摸床、惕して安からず、微喘直視す。脈弦の者は生き、洪の者は死す。微の者は但だ發熱す。譫語する者は大承氣湯之を主る。若し一服にて痢すれば後服を止む。」

若しくは下して、日晡所、状の如し、則ち、識らず、循衣摸床、惕して、洪、譫語、但だ、主る

解説 傷寒で、或いは吐せたり、あるいは下したりした後で、治るはずの病が治らずに大便が出ないことが5、6日から10数日まで及び、夕暮れになると潮熱を發して、惡寒をせず、独りごとを言い出し、その様子が死んだ人と話している様である。即ち譫語である。この様な症状が劇しい者で、発作的に起きると人事不省になってしまい、着物の襟をいじくったり、フトンの上を手探りしたりして、筋肉がケイレンを起こして安静にしていられず、少しゼイゼイして、目がすわり、脈を診て見ると弦であるものは、実であるから助かるし、洪っているものは死ぬ。病状が微かなもので、ただ熱を發してうわごとをいう者は、大承氣湯が主治する。もし大承氣湯を1回服用して下痢をしたならば、後は服用する必要はない。

陽明に燥熱があると、津液を損傷し、小便不利と同時に乾燥した便が腸内に停滞すると、腑気の流通が滞るので、5～6日甚だしい時には10日以上も排便が無くなり（排便困難）、腹満、腹痛を伴う。燥熱が、陽明の腑である胃家（胃、小腸、大腸）に停滞しているので、陽明の気が最も旺盛な時（陽明大腸は午後5～7時、陽明胃は午後7～9時）、正気と邪気の争いも激しくなるために、日晡所潮熱が生じる。「陽明経脈は四肢を主っており、四肢は諸陽の本である」故に、陽明の燥熱が盛んであると、汗は追われる様に外へ出るために、手足には絶えず汗がジワジワと出るが、病状が悪化して、燥熱による津液の損傷がひどいので沢山の汗は出なくなる。陽明の燥熱が心に影響すると、煩躁、心中懊憹として煩し、譫語、妄言が生じる。更に上に向って蒸した時には、眩暈が生じる。胃熱の時は、消化が早くなり空腹感が生じるが、乾燥した便が大腸に停滞すると、胃も腸も実し満ちているために胃気は正常な降濁が出来ない故に、食欲が無くなる。太陽と肺は、表裏関係にあるので、燥熱による乾燥した便が腸内に停滞し大腸の腑気の流通が滞ると、肺気も正常な宣散肃降が出来なくなるために、咳が生じる。また腑気の流通が滞ることにより、血脈の運行に影響するので、遅脈となり、その脈は実で力がある。陽明腑証は熱邪の勢力がとても強く、燥熱のために津液が損傷し、乾燥したピークの段階で、変化も速い故に、承氣湯類で、瀉下燥熱という果敢な処置を、機を逸せず取る必要がある。もし処置を取らないと、燥熱が体内の奥深く侵入し、腎陰をも損傷して、まさに陰液が亡びんとする危篤な状態になる。この様な場合は、視力がぼやけ、眼球の動きにもぶる状況が生じる。この時には、大承氣湯を用いて急いで瀉下し、陰を保護する必要がある。

大承氣湯は、大黃で脾胃の熱熱を瀉し、厚朴で脾胃の満を抜き、枳実で脾胃の痞を破り、芒硝で脾胃の燥を潤し堅を軟らげ、大黃・芒硝の瀉下作用を側面より援助し、全体で瀉下熱結の作用により、腑気の流れを改善し、胃気を下降させる。

大承氣湯は、日晡潮熱（日晡にかけてジワジワと高熱になる）で熱苦しくなる。惡寒は無い。腹満、便秘、手足の汗、譫語、舌苔が黄などを目標に、熱病の時や、食べ過ぎて熱が出た時などに用いる。

#### 弁陽明病脈証併治第八第39条（傷寒論）

「陽明病、譫語、潮熱有り、反って食す能わざる者は、胃中に必ず燥屎5、6枚有る也。若し能く食する者は但硬きのみ。宜しく大承氣湯にて之を下すべし。」

反って、食す能わざる、燥屎、若し能く、下す

解説 陽明病で、うわごとを言って、潮の様に身体の隅々まで段々と熱くなって来る様な熱（潮熱）を發して来るのは、胃熱があるからで、よく食べられるはずであるのに反って食べられない者は、胃中（胃に近い横行結腸の部分）に燥いた屎が必ず5、6個ある。もしもよく食欲があるものは、ただ大便が硬いだけなのである。燥屎のある者には大承氣湯が主治する。

#### 弁陽明病脈証併治第八第41条（傷寒論）

「汗出で譫語する者は燥屎有りて胃中に在るを以て此れを風と為す也。須らく、之を下すべし。過経も乃ち之を下すべし。之を下すこと若し早ければ語言必ず乱る。表虚裏実するを以ての故也。之を下せば則ち癒ゆ。大承氣湯に宜し。」

汗出で譫語する、燥屎、以て、須らく、下す、乃ち、若し、則ち

解説 汗が出て、うわごとを言う者は、燥屎が胃中（胃に近い横行結腸の部分）に在って胃実である。しかし表が虚して、汗が出る場合には、表が風によって侵されて起きたのである。この様な場合にも、燥屎があるから下してやるべきである。12日を過ぎた場合でも、下してやるべきである。ところが下し方がもしもはや過ぎると、言葉がハッキリしなくて聞き取りにくくなってしまふ。それは下し方が早すぎたために、表の邪が裏に落ち込んで、表虚裏実がひどくなってしまったためである。下しをかけてやれば、それで癒ゆるのである。それには大承氣湯がよい。

#### 弁陽明病脈証併治第八第44条（傷寒論）

「二陽の併病、太陽の証罷み但だ潮熱を發し、手足 繫 繫 として汗出で、大便難くして譫語する者は之を下せば則ち癒ゆ。大承氣湯に宜し。」

解説 二陽（太陽病と陽明病）の併病であったのが、太陽の病証が自然に止んで、ただ潮熱が出て来て、手足からジトジトと汗が出て、大便が出にくくなり、うわごとを言う者は、太陽の熱が胃に集まって胃実になったのであるから、下して裏の熱を取ってやれば、それで癒ゆるのである。それには大承氣湯がよい。

#### 弁陽明病脈証併治第八第59条（傷寒論）

「陽明病、之を下し、心中懊憹して煩し胃中に燥屎有る者は攻む可し、腹微満するは初頭硬く後必ず溏するは之を攻む可からず。若し燥屎ある者は大承氣湯に宜し。」

解説 陽明の経を病んでいて、下してから、熱が中に入って胸の中が空っぽになって、やるせなくなり、そして苦しむ様な人で、胃中（胃に近い横行結腸の部分）に燥屎のあるものは、下してやればよい。もしもこの時に、腹が少し張って来る者で、便が最初硬くて後から出る便は軟らかいものには、下しをかけてはいけないのである。脾胃が虚しているからである。もしも燥屎のあるものには、大承氣湯がよい。

#### 弁陽明病脈証併治第八第61条（傷寒論）

「病人煩熱汗出でて則ち解し、又瘧状の如く、日晡所發熱する者は陽明に属する也。脈実の者は宜しく之を下すべし。脈浮虚の者は宜しく汗を發すべし。之を下すには大承氣湯を与え、汗を發するには桂枝湯に宜し。」

解説 病人が熱に苦しんでいて、汗が出て解するもの、またマラリヤ様の症状を發し、夕暮れになると熱を發するものは、病が陽明に属している。その場合に、脈が実しているものは下すのがよいし、脈が浮いて弱いものは汗を發するのがよい。下すのには、大承氣湯を与えてやればよく、汗を發するのには桂枝湯がよい。

#### 弁陽明病脈証併治第八第62条（傷寒論）

「大いに下して後6、7日、大便出ず、煩、解せず、腹、満痛する者は此れ燥屎有る也。然る所以の者は本、宿食有るが故也。大承氣湯に宜し。」

解説 大いに下してから6、7日も大便が出ずに、もだえ苦しみ、腹全体が張って苦しく痛む場合は、燥屎が出来たからである。その原因は、元から宿食があったためである。大承氣湯がよい。

#### 弁陽明病脈証併治第八第63条（傷寒論）

「病人小便利せず、大便<sup>たちま</sup> 乍<sup>やす</sup> ち易く、時に微熱有り、喘冒して臥<sup>あた</sup>す能<sup>そうし</sup>わざる者は燥屎有る也。大承気湯に宜し。」

解説 病人が、小便がよく出ずに、大便が急に出にくくなったり急に気持ちよく出たり、時には微しく熱があつて、ゼイゼイして、頭がボーッとして横になることが出来ない様なものは、燥屎があるのである。大承気湯がよい。

#### 弁陽明病脈証併治第八第 73 条 (傷寒論)

「病を得て 2、3 日、脈弱、太陽、柴胡の証無く、煩躁し心下硬きこと 4、5 日に至らば、能く食すと雖も小承気湯を以て、少々与えて微しく之を和し、小しく安からしむ。6 日に至らば承気湯一升を与う。若し大便せざること 6、7 日なるも、小便少なき者は食す能わずと雖も、但だ初頭硬く後必ず溏し、未だ定まりて硬を成さず。之を攻むれば必ず溏す。小便利し屎の定硬を須ちて、乃ち之を攻む可し。大承気湯に宜し。」

能く食すと雖も、以て、微しく、小しく、若し、但だ、溏す、未だ、屎の定硬を須ちて、乃ち、攻む可し

解説 病に罹って 2、3 日経って、脈が弱くて、太陽病とか柴胡の証が無く、熱が苦しく、みぞおちの辺りが硬くなり、4、5 日になって食欲があつても、小承気湯を少しずつ与えて少し調和してやると、体が楽になる様子を見て、その翌日になって大便が出なかったならば、小承気湯の 1 回量を与えてやればよい。もしも大便がないこと 6、7 日も続いて、小便の回数、量とも少なく、食べることが出来なくて、便が初めだけ硬くて、後に出る便が泥状便の者は、まだ胃熱が実して来ないために便が硬くならないのであるから、下しをかけてしまうと、必ず便が軟らかくて下るのである。小便がよく出る様になって、大便が固まって来るのを待って、それから下してやるべきである。それには大承気湯がよい。

#### 弁陽明病脈証併治第八第 74 条 (傷寒論)

「傷寒 6、7 日、目中<sup>りょうりょう</sup>了<sup>りょうりょう</sup>了<sup>りょうりょう</sup> たらず、晴和せず、表裏の証無く、大便<sup>がた</sup> 難<sup>しんかすか</sup>く。身<sup>がた</sup> 微<sup>しんかすか</sup> に熱する者は此れを實と為す也。急に之を<sup>くだ</sup>下せ。大承気湯に宜し。」

解説 傷寒に罹って 6、7 日経って、目の中がハッキリしないで眼玉がトロンとしていて、表証も裏証も現わしておらず、大便が硬くて出にくく、身体に少し熱のある者は、病邪が実しているのであるから、急いで下してやればよい。それには大承気湯がよい。

#### 弁陽明病脈証併治第八第 75 条 (傷寒論)

「陽明の発熱汗多き者は急に之を<sup>くだ</sup>下せ。大承気湯に宜し。」

解説 陽明病で、熱を發して、汗の出方が非常に多い者は、急いで下しをかけてやりなさい。それには大承気湯がよい。

#### 弁陽明病脈証併治第八第 76 条 (傷寒論)

「発汗解せず、腹、満痛する者は急に之を<sup>くだ</sup>下せ。大承気湯に宜し。」

解説 汗を發しても病が解さないで、発汗後に腹が一杯に張って痛い者は、急いで下してやりなさい。それには大承気湯がよい。

#### 弁陽明病脈証併治第八第 77 条 (傷寒論)

「腹満減せず、減ずるも言うに足らざるは<sup>まさ</sup>当<sup>まさ</sup>に之を<sup>くだ</sup>下すべし。大承気湯に宜し。」

解説 腹が張って苦しくて、少しも腹満が楽にならず、減ったと当人が言っても言うほどでないものは、裏の実熱が原因であるから当然下しをかけてやるべきである。それには大承気湯がよい。

#### 弁陽明病脈証併治第八第 78 条 (傷寒論)

「陽明と少陽の合病は必ず下痢す。其の脈負ならざる者は順也。負は失也、互いに相克賊するを名づけて負と為す也。脈滑にして数の者は宿食有る也。当に之を下すべし。大承気湯に宜し。」

相克賊、數、當に之を下すべし、

解説 陽明と少陽とが同時に病んだものは、必ず下痢をする。その場合に、脈が、陽明の土と少陽の木とが争わなければ、順とするのである。即ち木が勝つということであり、治り易い。少陽の木が、陽明の土に剋されるものは負といって、治し難いのである。互いにケンカをして、働きを抑えつけてしまうことを負とするのである。陽明と少陽の合病で、下痢をしていて、脈が滑で、数のものは、宿食があるのであるから当然、下してやればよい。それには大承気湯がよい。

#### 弁少陰病脈証併治第十一第 40 条 (傷寒論)

「少陰病之を得て 2、3 日、口燥咽乾する者は急に之を<sup>くだ</sup>下せ。大承気湯に宜し。」

解説 少陰病になってから 2、3 日経って、口に熱を持って苦しく、咽の乾く者は、急いで下してやりなさい。それには大承気湯がよい。

この条文は、少陰病の裏寒症が、陽明内実症に変わった場合を説明している。

#### 弁少陰病脈証併治第十一第 41 条 (傷寒論)

「少陰病、自痢清水、色純青、心下必ず痛み、口乾燥する者は急に之を<sup>くだ</sup>下すべし。大承気湯に宜し。」

解説 少陰病で、純青色の水様の下痢があつて、みぞおちが必ず痛んで、口が渴いて、熱をもっている者は、急いで下してやるべきである。それには大承気湯がよい。

この条文も、少陰病の裏寒症が、陽明内実症に変わった場合を説明している。

#### 弁少陰病脈証併治第十一第 42 条 (傷寒論)

「少陰病 6、7 日、腹脹大便せざる者は急に之を<sup>くだ</sup>下せ。大承気湯に宜し。」

解説 少陰病で、6、7 日も腹が張って、大便が出ない者は、急いで下してやりなさい。それには大承気湯がよい。

この条文も、少陰病の裏寒症が、陽明内実症に変わった場合を説明している。

#### 弁可下病脈証併治第二十一第 3 条 (傷寒論)

「下痢三部の脈皆平、之を按じて心下硬き者は急に之を下せ。大承気湯に宜し。」

解説 下痢をしていながら、寸関尺の三部の脈が皆平脈で、みぞおちを押してみると硬く触れるのは、急いで下しなさい。大承気湯の服用がよい。

#### 弁可下病脈証併治第二十一第 4 条 (傷寒論)

「下痢脈遲にして滑の者は内実也。痢未だ止むを欲せず。當に之を<sup>くだ</sup>下せ。大承気湯に宜し。」

解説 下痢をしていて、脈が遅で、滑なのは、裏が実しているのである。下痢が未だ止みそうに無いものは、これを下すべきである。大承気湯の服用がよい。

#### 弁可下病脈証併治第二十一第 5 条 (傷寒論)

「問うて曰く、人病み宿食有るは何を以て之を別つ。師曰く寸口の脈浮にして大、之を按じて反って洪、尺中亦微にして洪、故に宿食有るを知る。当に之を下すべし。大承気湯に宜し。」

曰く、以て、別つ、かえって、洪、赤、當に之を下す

解説 お尋ねしますが、病人に宿食が有るか無いかを、何でこれを区別したらよいのですか？

師が云われるには、寸口の脈が浮いていて大きく、よく按じてみると反って洪っている。尺中の脈もまた微で、洪っているのは、それで宿食があるということを知るのである。これを下すべきである。大承気湯の服用がよい。

寸口の脈が浮いていて大きく、よく按じてみると反って洪り、尺中の脈もまた微で、洪っているのは、陽明胃経の陽気が高く、腹中に瘀血があることを意味するのではなからうか？

#### 弁可下病脈証併治第二十一第6条（傷寒論）

「下痢、食を欲せざる者は宿食有る也。宜しく當に大承気湯を与えて之を下すべし。」

解説 下痢をしていて食欲の無いのは、宿食があるからである。これを下すべきである。大承気湯を与えなさい。

#### 弁可下病脈証併治第二十一第7条（傷寒論）

「下痢瘥えたる後、其の年月日に至り復た発する者は病尽きざるを以ての故也。當に之を下すべし。大承気湯に宜し。」

解説 下痢が治った後で、その時期になって再び発病するのは、病が尽きないからであるから、これを下すべきである。大承気湯がよい。

#### 弁可下病脈証併治第二十一第8条（傷寒論）

「下痢、脈反って滑なるは當に去る所有るべし。之を下せば乃ち瘥ゆ、大承気湯に宜し。」

解説 下痢をしていて、反って脈が滑なのは、胃中に滞っているものがあるはずである。これを下せばそれで癒えるのである。大承気湯がよい。

#### 弁可下病脈証併治第二十一第9条（傷寒論）

「病、腹中満痛する者、此れ実と為す也。當に之を下すべし。大承気湯に宜し。」

解説 病人の腹がパンパンに張って痛むものは、内実であるから、当然これを下すべきである。それには大承気湯がよい。

#### 弁可下病脈証併治第二十一第11条（傷寒論）

「脈双弦にして遅の者は必ず心下硬し。脈大にして緊の者は、陽中に陰有る也。以て之を下すべし。大承気湯に宜し。」

解説 左右両方の脈が弦で、遅なるは、必ずみぞおちが硬いのである。脈が大で、緊であるものは、陽中に陰が伏しているのである。だから下すべきである。大承気湯の服用がよい。

#### 瘧湿喝病脈証併治第二第13条（金匱要略）

「瘧の病たる胸満して口噤し臥して席に着かず脚攣急し必ず齧齒す大承気湯を与うべし。」

解説 瘧の病というのは、発汗し過ぎたために起こしたもので、そのために熱が内に落ち込んで実していまい、胸満（胸が張って苦しく）、口噤（口を閉じたままになることで、唇は胃の経がぐるりと回っているから胃実で熱が結すると唇がけいれんを起こす）して、横になっていられない（一種の煩躁で、身が弓なりになって寝床につけない状態をいう）で、足が引きつれて、必ず歯ざしりをする者には、大承気湯を服用させてやればよい。

この場合は、陽明腑証の瘧病で、胃熱が上衝するもので、手の陽明大腸経から足の陽明胃経にかけて、上下の齒齧から唇にかけての経に熱がこもっている。胃熱があると歯ざしりをする。大承気湯で脾胃の実熱を取り去ると改善する。

大承気湯の大黃で脾胃の実熱を瀉し、厚朴で脾胃の満を抜き、枳実で脾胃の痞えを破り、芒硝で脾胃の燥を潤し堅を軟らげる。即ち、大承気湯は胃家実を瀉し、瘧の本を断つ。

#### 腹満寒疝宿食病脈証併治第十第13条（金匱要略）

「腹満して減ぜず、減ずるも言うに足らざるは、當に須らく之を下すべし、大承気湯に宜し。」

解説 腹満をしていて、下した後で腹満が減らず、または言う程の減り方をしないものは、之を下さなくてはならない、それには大承気湯がよい。

#### 腹満寒疝宿食病脈証併治第十第25条（金匱要略）

「問うて曰く、人病んで宿食有するは何を以て之を別つ、」

師の曰く、寸口の脈浮にして大、これを按ずれば反って洪尺中もまた微にして洪、故に宿食あるを知る大承気湯これを主どる。

解説 お尋ねしますが、腹満とか腹痛を病んでいて、宿食が有るか、無いかは、どうしてこれを判別したらよいのですか？（この質問に対する一つ目の答え）

師が答えて云われるには、

病人の寸口の脈が浮いていて、大きいのが、これを押えてみると反って洪っている。尺中の脈もまた微かで、洪っているのは、これで宿食があるということを知るのである。大承気湯が主治する。

#### 腹満寒疝宿食病脈証併治第十第26条（金匱要略）

「問うて曰く、人病んで宿食有するは何を以て之を別つ、」

師の曰く、脈数にして滑の者は実なり。これ宿食あり、これを下せば瘥ゆ、大承気湯に宜し。

解説 お尋ねしますが、腹満とか腹痛を病んでいて、宿食が有るか、無いかは、どうしてこれを判別したらよいのですか？（この質問に対する二つ目の答え）

師が答えて云われるには、

腹痛腹満のある人で、脈が早くてクリクリしたのは実である。これも宿食があるのである。これを下してやれば癒える。大承気湯がよい。

#### 腹満寒疝宿食病脈証併治第十第27条（金匱要略）

「問うて曰く、人病んで宿食有するは何を以て之を別つ、」

師の曰く、下利して食を欲せざる者、宿食あるなり、當にこれを下すべし、大承気湯に宜し。

解説 お尋ねしますが、腹満とか腹痛を病んでいて、宿食が有るか、無いかは、どうしてこれを判別したらよいのですか？（この質問に対する三つ目の答え）

師が答えて云われるには、

腹満腹痛のある人で、下痢をして食欲のないものは、宿食があるのである。当然下してやるべきである。それには大承気湯がよい。

#### 嘔吐噦下痢病脈証併治第十七第40条（金匱要略）

「下痢三部の脈皆平、之を按じて心下堅き者は急に之を<sup>くだ</sup>下せ、大承気湯に宜し。」

解説 下痢をしていて、三部の脈（寸口、関上、尺中の脈）が皆平常と変わりなく、心下を按じてみると堅いものは大急ぎで下してやりなさい。下すのには大承気湯がよい。

嘔吐噦下痢病脈証併治第十七第 41 条（金匱要略）

「下痢脈遅にして滑の者実也、痢未だ止むを欲せざるは急に之を<sup>くだ</sup>下せ、大承気湯に宜し。」

解説 下痢をしていて、脈が遅くて、クリクリした脈を現わす者は、内が実しているのである。下痢が今にも止まりそうにもない者は、急いで之を下してやりなさい。それには大承気湯がよい。

この場合の遅脈は、寒ではなく、停滞を現わし実脈である。滑も実脈を現わす。故にこの下痢は胃腸の宿滞を現わす。

嘔吐噦下痢病脈証併治第十七第 42 条（金匱要略）

「下痢脈反<sup>かえ</sup>つて滑の者<sup>まき</sup>当に去らんとする所あるべし。<sup>くだ</sup>下せば乃ち癒ゆ、大承気湯に宜し。」

解説 下痢をしていて、脈が反<sup>かえ</sup>つて滑の者は、当然取り除いてやる所が中にあるはずである。例えば宿食などである。下してやれば癒えるのである。それには大承気湯がよい。

下痢をすれば、脈は一般に虚弱となるはずである。下痢していても、脈の滑、実なのは、宿滞があるためである。

嘔吐噦下痢病脈証併治第十七第 43 条（金匱要略）

「下痢<sup>すて</sup>已に瘥え其の年月日時に至り<sup>また</sup>復発する者病尽きざるを以ての故也、<sup>まき</sup>当に之を<sup>くだ</sup>下せ、大承気湯に宜し。」

解説 下痢をしているのが瘥えて、その年月日になると、また下痢を起こす（一年経った同じ頃に繰り返して下痢を起こす）者は、病根が尽きていないからである。当然下してやるべきである。それには大承気湯がよい。

婦人産後病脈証併治第二十一第 1 条（金匱要略）

「問うて曰く、新産婦人に三病有り、一なる者瘥を病み、二なる者鬱冒を病み、三なる者大便難しとは何の謂いぞや。師曰く、新産血虚するに汗出ること多く喜風に中る故に瘥を病ましむ。亡血復汗し寒多きが故に鬱冒せしむ。津液を亡い胃燥く、故に大便難し。産婦鬱冒は其の脈微弱、嘔して食す能わず、大便反<sup>かえ</sup>つて堅く但頭汗出ず。然る所以の者は血虚して厥す、厥すれば必ず冒す。冒家解せんと欲すれば必ず大いに汗出ず、血虚下厥、孤陽上に出ずるを以ての故に頭汗出ず。産婦喜汗出ずる所以の者は陰亡びて血虚し陽気独り盛、故に当に汗出でて陰陽乃ち復すべし。大便堅く嘔して食す能わざるは<sup>かえ</sup>小柴胡湯之を主る。病解し能く食し、7、8 日更に発熱する者、此れ胃実すると為す。大承気湯之を主る。」

<sup>うつぼう</sup>鬱冒、<sup>がた</sup>大便難し、<sup>しばばふう</sup>喜風<sup>あた</sup>に中る、<sup>また</sup>復、<sup>うしな</sup>亡い、<sup>あた</sup>食す能わず、<sup>かえ</sup>反<sup>ただ</sup>つて、<sup>しか</sup>但、<sup>ゆえん</sup>然る所以の、<sup>かけつ</sup>下厥、<sup>い</sup>上に出ずる、<sup>もつ</sup>以て、<sup>しばしば</sup>喜

<sup>まき</sup>当に、<sup>すなわ</sup>乃ち、<sup>よ</sup>能く、<sup>よ</sup>主る、<sup>よ</sup>能く食し

解説 お尋ねしますが、産後直ぐに起こし易い病に、次の三つがある。その一つは瘥病である。その二つは鬱冒を病む。その三つは大便秘の出にくいのを苦しむが、どういう訳でしょうか？

師が曰われるには、

産後すぐには、血が虚して、陰が虚してしまったために陽が多すぎるのが原因して、熱がって、汗がよく出る。そのために風に当たりたがるのである。そこで体を冷やしたために表が虚して、瘥病を病む様になるのである。

血虚して貧血し、その上に発汗をし熱を奪われて、表が虚して冷えが生じたために、気が頭部にこもって冒を病む様になるのである。

血虚の上に発汗して、体液のムラを生じて、そのために胃がカラカラに燥いて熱を持ち、それで大便が出にくくなるのである。

産婦が鬱冒を病むと、脈が微かで弱くなり、表が塞がって、嘔いて食べられず、大便は反<sup>かえ</sup>つて堅くなり、ただ頭からだけ汗が出る。そうなる理由は、産後は、血虚して貧血しているから、血の循環が悪くなり身体が冷える。気血の循環が悪くなると、営血衛気が頭面に発達できなくなるので、必ず冒が起きるのである。冒を起こしている病人は、回復する時には大変汗が出るのである。これは血虚して、下半身が冷え、裏位腎の命門の陽気が守位の陰を離れて、陽気だけが上に浮昇するから、頭から汗が出るのである。血である陰が少なくなって血虚し、そのために陽気だけが盛んになってしまうから、それで汗が出て陰陽の調和をするのである。

産婦で鬱冒している者で、大便が堅くて、嘔いて、食欲が無い者は、<sup>かえ</sup>小柴胡湯で胃の陽気を回復すると、浮昇した命門の陽気も守位腎に復帰し、胃と腎が正常になり、血熱が鎮まると、全身から汗が出て病は治るのである。<sup>かえ</sup>小柴胡湯を服用して病が回復し、食欲が出て来てよく食べられる様になったのに、7、8 日して再び熱が出て来たものは、これは胃が実しているから、<sup>まき</sup>大承気湯が主治する。

瘥病は、熱性病中に現われる病証で、身熱足寒、頸項反張、背反張、突然の口噤、頭が自然に動く、脈沈細、あるいは強急などがある。

瘥病は、六淫（風邪、寒邪、湿邪、火邪、燥邪、暑邪）の侵襲、化燥、化風によって起こる。熱が盛んで陰を傷り、更に誤つて発汗、吐、下した重症なものは、瘥を起こし易い。

発熱無汗、反<sup>かえ</sup>つて悪寒するものを剛瘥といい、発熱、汗出で、悪寒しないものを柔瘥という。

婦人産後病脈証併治第二十一第 5 条（金匱要略）

「産後 7、8 日、太陽の証無く少腹堅痛するは此れ悪露尽きず、大便せず煩躁発熱し、脈を切するに微に実す。再び発熱倍し日晡時煩躁する者は食せず、食すれば則ち譫語し、夜に至り即ち癒ゆ、宜しく<sup>まき</sup>大承気湯之を主るべし。熱裏に在り、結して、膀胱に在る也。」

<sup>おろつ</sup>悪露尽きず、<sup>わずか</sup>微に、<sup>にっぽし</sup>日晡時、<sup>すなわ</sup>則ち、<sup>せんご</sup>譫語、<sup>つかさど</sup>主るべし

解説 産後 7、8 日を経過して、太陽の病証がなく（風邪から来ているのではない）、下腹部が堅く痛むのは、これは悪露（おりもの）が尽きないのである。大便が思う様に出ず、苦しみ騒いで、発熱している。脈を診てみると、少ししっかりしている。潮熱（日暮れになると再び発熱がひどくなる）し、苦しみ騒ぐものは、食べられないはずである。それを無理に食べると、うわごとを言う様になってしまう。そして夜になると落ち着いて、煩躁が治ってしまうのである。こういう状態のものには、<sup>まき</sup>大承気湯を与えるのが一番よい。これは、熱が体内にあって、その熱が膀胱に結ばれているのである。